

まぼろしの八角九重塔を復元する —法勝寺塔跡の発掘によせて—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>
(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

はじめに 2010年春、京都岡崎で法勝寺の塔の遺跡が姿をあらわしました。八角で九重という他

に例をみない形式、81mという巨大さ、永保元年(1081)白河天皇が建立した奇想の塔は、暦応5年

(1342)の火災で焼失してからおよそ670年間、まぼろしの塔として土の中に埋もれていたのです。

もちろんこの塔は古くからよく知られた建築で、建都1200年記念で1994年に開催の『甦る平安京』展では、復元模型も出品されました(現在、京都アスニーに展示)。筆者は、この模型の設計に携わって以来、法勝寺の研究に取り組んできましたが、今回の発掘調査を受け、あらたに復元をしました。

はじめの復元 最初にこの塔を復元したときは、建保元年(1213)再建の塔の高さが27丈(約81m)、かつて岡崎にのこっていた基壇跡の直径が約30mで、初重には裳階という付属の屋根がつき、最後に焼失したとき屋根は檜皮葺だったことくらいしか知られていませんでした。当時、大学院生だった筆者は、こうした情報をもとに、諸先生の指導のもと、時代の近い醍醐寺五重塔や、現存唯一の八角形の塔である安楽寺八角三重塔などを参考にして、復元設計図を描きました。この設計図をもとに『甦る平安京』展の復元模型がつくられ、檜皮葺で繊細・優美な塔がたちあられました。

あらたな復元へ その後、研究を進めていくなかで、どうもこの復元は違うのではないかと考えるようになりました。違いはいくつ

もありますが(ぜひ、二つの復元の違いを探してみてください)、もっとも大きく異なるのは屋根です。

八角九重塔の最期について『太平記』には、たしかに乾いた檜皮に火の粉が落ちて燃え移ったと書かれているのですが、元暦2年(1185)の大地震のときは瓦が剥がれ落ちたと、九条兼実の日記『玉葉』に記されているのを見つけたのです。そして2010年の発掘で、塔の跡から平安時代の瓦が数多く発見されました。こうした事実から、創建当時、九重塔の屋根は瓦葺と考えました。

瓦葺の屋根は、檜皮葺とくらべ、はるかに重くなります。九重塔の

跡を発掘すると、深くまで穴を掘って土を出し、かわりに大きな丸石を大量に詰め込んでつき固めていました。ここまで徹底した地盤改良は他に例がなく、大きく重い瓦葺の屋根が九つも重なるといふ、この塔ならではのものといえます。今回は塔を組み上げる構造から考えなおし、あらたな復元図とCGを作成しました。1994年の復元にくらべ、重厚で安定感のある塔になりました。

復元設計とは それにしても、1994年と今回の復元には大きなちがいがあります。じつは、このちがいは、復元を見るとき大切なポイントでもあるのです。

復元設計は、史実をもとになさ

れることはいうまでもありません。しかし、実際の復元ではわからないことも多く、全体の仕上がりは、どうしても設計者の歴史観や美意識に影響されます。また、二つの復元がよくあらわしているように、研究が進んで新たな事実がわかると、復元も変わってきます。

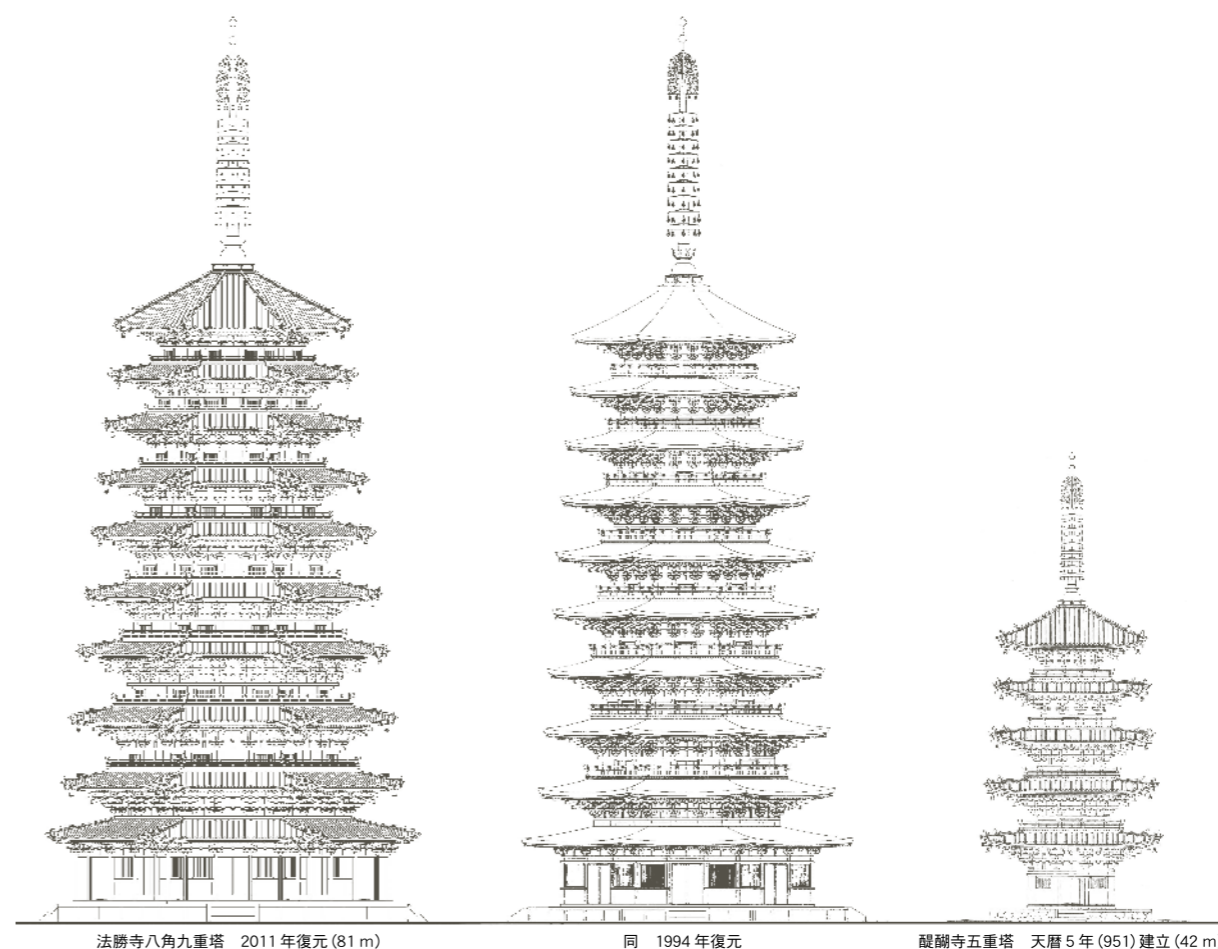
復元は歴史研究のプロセスを反映するもので、史実の探究はもちろん、想像力をはたらかせていくところに魅力があるのです。

(滋賀県立大学 富島義幸)

〔付記〕醍醐寺五重塔立面図は『日本建築史基礎資料集11』(中央公論美術出版、1984)より転載し、2011年復元の図面・CGは竹川浩平が作成した。



今回CG復元した法勝寺八角九重塔



法勝寺八角九重塔 2011年復元(81m)

同 1994年復元

醍醐寺五重塔 天曆5年(951)建立(42m)

法勝寺八角九重塔復元立面図を比較する

復元の参考とした醍醐寺五重塔は、現存する塔のなかでは規模が大きく、たいへん立派ですが、法勝寺八角九重塔とくらべると半分ほどの高さです。